

No. 14

東京大学医学教育 国際協力研究センター

東京大学医学教育
国際協力研究センター

〒113-0033
東京都文京区本郷 7-3-1
医学部総合中央館 2F
TEL 03-5841-3583
FAX 03-5802-1845

E-mail: ircleme @ m.u-tokyo.ac.jp
http://www.ircleme.u-tokyo.ac.jp

表題：海野 濤山書



セタティラート病院で米国の NGO グループによるベッドサイド教育を視察

International Research Center for Medical Education

CONTENTS

◆ JICA ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト2	◆ 中国出張報告5
センター講師 大西弘高	センター教授 北村 聖
センター助教 錦織 宏	◆ イギリス出張報告5
センター特任研究員 田中 紫	センター教授 錦織 宏
◆ 「医学教育」ラオス・アフガニスタン合同国別研修3	◆ 外国人客員研究員報告6
センター特任研究員 田中 紫	外国人客員教授 Dr. Shirin Aqa Zarif
◆ 第7回医学教育国際協力研究フォーラム4	外国人客員教授 Dr. Mohammad Farid Barnayar
センター講師 大西弘高	外国人客員准教授 Dr. Dwi Tyastuti Kusuma
◆ JICA アフガニスタン医学教育プロジェクト短期専門家派遣報告 ...4	◆ 着任挨拶7
センター講師 大西弘高	客員研究員 杉本なおみ
◆ アメリカ出張報告5	特任研究員 三木祐子
センター教授 北村 聖	◆ センター日誌8

JICA ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト

背景と概要

ラオス国政府は、「保健戦略2020(Health Strategy 2020)」において全国民に対する保健医療サービスの公平な提供を掲げており、各レベルにおける医療従事者の人材育成を最も重要な政策の一つとして位置付けている。医療従事者の人材育成に中心的役割を果たす質の高い臨床医養成のためには、医師の基本的な能力としての知識・技術・態度の向上が必要であり、そのためには卒前及び卒後早期臨床研修が重要な役割を果たすと考えられる。

当該プロジェクトは、ラオス国における中核的医療機関の一つであるセタティラート大学病院を拠点とし、今後3ヵ年で1) ラオス保健科学大学医学部生の臨床実習、2) 医学部卒業2年以内の卒後早期臨床研修の2種類の臨床研修の質を向上することを目標とし、国際協力機構(JICA) から2007年9月に公示された。

当センターは民間コンサルタントのシステム科学コンサルタンツ(株)と共同企業体を結成し、11月末に「ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト」の実施をJICAより受託した。2007年度の活動は早速12月より開始され、ベースライン調査が急ピッチで進められた。(特任研究員 田中 紫)

これまでの流れ

2007年9月26日	公示
10月3日	関心表明書の提出
10月3～7日	情報収集のため、田中紫技術補佐員がラオス現地緊急調査を実施
10月24日	プロポーザル等の提出
10月30日	大西弘高講師による総括プレゼンテーション
11月8日	審査結果の通知
11月15～26日	JICA との契約交渉 (計3回)
11月30日	JICA と業務実施契約の締結
12月1日	システム科学コンサルタンツ (株) と共同企業体合意書 / 協定書の締結
12月3日、5日	専門家派遣前会議
12月4日	プロジェクトメンバー現地活動開始
大西弘高 (センター講師、プロジェクト総括)	
12/13～21, 1/21～2/10, 2/18～3/3	
北村聖 (センター教授)	
12/24～1/5, 2/18～28	
神馬征峰 (医学系研究科国際地域保健学教授)	
12/12～16, 12/20～24, 1/13～19, 2/21～3/4	
黒岩宙司 (医学系研究科国際保健計画学准教授)	
12/4～9, 2/12～17, 2/26～3/6	
錦織宏 (センター助教)	
12/5～11, 1/27～2/2, 3/9～15	
2008年3月15日	2007年度現地活動終了
3月17日	ベースライン調査報告書、業務完了報告書をJICA 本部へ提出
4月7日～5月3日	セタティラート病院より2名、保健科学大学より2名の研修員が本邦研修のため来日

現場の医療状況

2007年12月から始まったラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト。私自身、発展途上国の援助に関わるのは初めてですが、見聞きした中からラオス国、特にセタティラート病院の医療状況について報告します。

ラオス国は土地柄なのか、国民の多くは非常におおらかです。医師をはじめとする医療従事者も非常におおらか。病院の救急外来でもあまりバタバタした雰囲気はありません。日本で最近増えてきているような医療訴訟なんて存在しなさそう…。そんな風に思えますが、実際に外来や病棟に行ってみると、あまり原因を追究せずに対症的に行われている医療や、清拭などのケアのない看護など、我々の目から見ると問題点に思える部分も多くあります。

本プロジェクトの目的はセタティラート病院のソフト面を、医学教育を通じて充実化すること。ただどうやら



第1回合同調整委員会

教育理論や手法 (How to teach) に加えて、医療者が提供する医療の質そのもの (What to teach) にもある程度介入する必要があるかもしれないと感じ始めています。3年間のプロジェクトでどこまで自分たちにできるのか、これからはとても楽しみです。(助教 錦織 宏)

ベースライン調査

JICAからの業務指示で、2007年12月～2008年3月までの4ヶ月が当プロジェクトにおいて短い初年度の活動期間であり、今後の活動の方向性を決めるためのベースライン調査を行うこととなった。センターからは、北村聖教授が12月24日～1月5日（13日間）と2月18～28日（11日間）の2回、錦織宏助教が12月5～11日（7日間）、1月27日～2月2日（7日間）、3月9～15日（7日間）の3回、大西が12月13～21日（9日間）、1月21日～2月10日（23日間）、2月18日～3月3日（13日間）の3回渡航した。また、東大チームには大学院医学系研究科・国際地域保健学教授の神馬征峰教授、同じく国際保健計画学の黒岩宙司准教授にも参加いただいた。そして、2004年に当センターに客員教授として来られた前ラオス国立大学医学部長のブンサイ先生が様々な形で手伝って下さったのはとても嬉しいことであった。

調査開始時に、インセプションレポートがまとめられた。内容は、業務実施の範囲・内容・手法・工程・技術移転の方法、ベースライン調査の具体的内容・手法・工程であった。これは、12月14日・19日の2日間に渡り、カウンターパート及び関係諸機関に対して説明された。また、量的調査と医学生・研修医へのフォー

カス・グループ・インタビューについては、調査日程が短く、データのバイアスを避ける意味でも予算が付けられていたため、フランコフォニー熱帯医学研究所に外部委託した。

団員による調査は、主にセタティラート病院、保健科学大学医学部、他の3大学病院（マホソット病院、ミタパープ病院、母子病院）などビエンチャン市内で行われた。これに加え、北村聖教授がルアンパバーン、大西がウドムサイとルアンパバーン、神馬征峰教授がサワナケットとチャンパサックに赴いて地域での臨床教育現場を視察した。

さて、調査結果として浮かび上がった問題は、大きく分けて、①研修医、医学生の数が事前調査の際に示されていたデータと異なる、②医療面接・身体診察といった基本的臨床能力が指導医レベルでも不足している、③セタティラート病院が他の大学病院と比べて歴史（大学病院になって4年）、地理（ビエンチャン市の郊外）の点から他の病院を凌駕するほどの力を持たない、の3つであった。今後、セタティラート病院を改善していくために、基本的臨床能力の底上げを図りつつ、指導医の教育技法を向上していく必要がある。また、保健科学大学や他の3つの大学病院と連携し、基本的臨床能力+指導医の教育技法という枠組みを拡大していきたいと考えている。（講師 大西弘高）

「医学教育」ラオス・アフガニスタン合同国別研修

特任研究員 田中 紫

4月9日からJICA「セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト」において、ラオス人医師4名（セタティラート病院2名、保健科学大学2名）の研修員を受入れました。また、今年6月のJICAアフガニスタン「医学教育」プロジェクトの終了を前に、4月15日からカブール医科大学教員8名を最後のグループとして同時に受入れ、初めての合同研修の実施となりました。ラオスからの研修員は、アフガニスタンの研修員より研修を数日早く開始しましたが、どちらのグループも限られた時間の中でより多くの新しい知識を吸収しようとする前向きな姿勢でした。また研修中は、国や文化の違いを飛び越え、医学教育をひとつのキーワードとし、互いに活発なディスカッションを展開していました。研修の集大成であるアクションプラン発表会は、4月30日にJICA東京で開かれ、今回初の試みとして、ラオス、アフガニスタンのJICA事務所とテレビ会議システムでの中継方式で行われました。初めの15分ほど、アフガニスタンからの中継に問題ありましたが、その後は特に大きな問題もなく、ラオ



東京大学医学部附属病院内の内科講堂にて

スやアフガニスタンからも多くの質問や意見が互いに飛び交い、アクションプランの実現に明るい兆しが見られる非常に貴重な、そして有意義な発表会となりました。

最後になりましたが、本研修にご協力くださいました関係者の皆様には、この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

第7回医学教育国際協力研究フォーラム

講師 大西弘高

当センターでは、概ね年1回のペースで医学教育と国際協力の接点を探る内容のフォーラムを実施してきた。今回は、文部科学省大臣官房国際課、独立行政法人国際協力機構（JICA）、独立行政法人国際協力銀行（JBIC）からの後援を得て、「国際教育協力領域のODA委託事業に対する大学の参入」と題し、文部科学省、JICA、JBICのようなドナー側と、ODA委託プロジェクトに関わった経験のある大学、そして国際協力に豊富な経験を持ちドナーと大学とを取り持つコンサルタント会社が一堂に会する場を設けることにした。プログラムは以下の通りであった。

〈プログラム〉

第1部「国際教育協力領域のODA委託事業における大学の役割および大学への期待」

- 文科省大臣官房国際課国際協力政策室 梅澤 敦氏
- 国際協力機構人間開発部管理グループ長 寺西義英氏
- 国際協力銀行プロジェクト開発部次長 大金正知氏

第2部「大学によるODA委託事業の実践と考察」

- 早稲田大学商学大学院 大江 建 教授
- 広島大学大学院国際協力研究科 馬場卓也 准教授
- 鳴門教育大学学校教育学部 近森憲助 教授
- 東京大学医学教育国際協力研究センター 大西弘高 講師

第3部「民間コンサルタントから見た大学との連携の現状と課題」

- 社団法人海外コンサルティング企業協会 高梨 寿氏

第4部「質疑および討論」



質疑および討論の様子

文科省は大臣官房国際課が推進する国際協力イニシアチブの内容、ODA委託元であるJICA、JBICは委託業務の概要や大学との連携促進の方法に関しての内容であった。大学からの発表は、いずれも慣れない委託業務をどのように乗り越えていくかという経験を踏まえたものが多く、今後この分野に進出しようとする大学にとって参考になるのではないかとされた。海外コンサルティング企業協会の高梨氏は、コンサルタント会社から大学への期待、大学にとって直営方式と委託方式のプロジェクト間で何が異なるか、大学が今後委託プロジェクトを受託・運営するために必要なことをコンパクトにまとめられた。聴衆にはコンサルタント会社の人が多かったが、今後コンサルタント会社と大学の間でもっと直接的な議論が出来る場を設けてもいいのではないかと感じられた。

JICA アフガニスタン医学教育プロジェクト短期専門家派遣報告

講師 大西弘高

JICA アフガニスタン医学教育プロジェクトは3年間のプロジェクトで2005年7月から開始され、既に2年半が経った。今回は1月7日出発、18日帰国という日程で6回目のアフガニスタン入りとなった。降水量の少ないカブルでも冬は結構雪が降り、いつもは土や岩が剥き出しの山々もこの季節は綺麗に雪化粧する。ただ、オフィスもゲストハウスも部屋の中が10℃以下というような寒さの中で、頭は冴えても手がかじかんでキーボードが上手く打てないのが辛い経験となった。

進捗状況としては、学内ではPBLを正式カリキュラム

として組み込む流れが出来始め、大学病院では学生が実際に患者を診て、症例プレゼンテーションにつなげていく形の臨床教育が標準的な教育になりつつあった。ただ、教育開発センター(EDC)は授業やカリキュラムの評価をようやくやり始めた段階で、なかなか具体的な成果を挙げられないうまみである。長期専門家としてこのプロジェクトの中心を担っている足立拓也先生(当センター客員研究員)は、その中でスタディガイドの作成、OSCEの実施など地道な活動を続けて来られていて、いつも頭の下がる思いである。今後もサステナブルな医学教育システムの構築に尽力したい。

アメリカ出張報告

教授 北村 聖

3月7日から12日、米国の医学教育を視察した。訪問大学はミシガン州立ミシガン大学と、カリフォルニアにあるスタンフォード大学である。

ミシガン大学医学部はミシガン州における最高の医学教育を提供しており、全米でも常に上位にランクされている。その教育はとくに気負ったようなものではなく、標準的な教育を確実にやっていると感じた。教育全体の管理は Department of Medical Education で行われ、卒前教育が主な業務であるが同じフロアに生涯教育 (CME) を担当する部門も配置し、卒後教育をも管理運営していた。さらに研究対象として糖尿病の患者教育の分野なども扱っていた。

臨床実習の現場である大学病院は、約 1,000 床の近代的病院で地域の中核病院としての機能以外にも、癌の先端的な研究的治療なども行われていた。学生は病院では主に参加型の臨床実習を行

ない臨床能力の研鑽をしており堅実な取り組みと理解した。臨床技能実習室 (シミュレーションラボ) も充実しており、学生レベルのトレーニングに加えて、とくに内視鏡手術の最先端のシミュレーターが数多く配置され、レジデントや専門医教育を受けている医師にも有効活用されていた。

ミシガン大学を訪問して学んだことは、医学教育においては特異なことは特段必要とせず、標準的な教育を確実にやっていくことの強みを感じた。

スタンフォード大学では、主に研究部門を見学した。経済の好況期に多くの研究所が建築され、IT と BIO が研究のキーワードとなってもものすごいエネルギーが医学研究に割かれていると感じた。さらに幹細胞研究のベンチャー企業や IT 検索の企業の研究所も見学した。

中国出張報告

教授 北村 聖

3月20日から23日まで、北京の中国科学院教育院、ならびに微生物研究所を訪問した。目的は中国における医学研究者養成の現状を調査し、微生物研究所内にある東京大学医科学研究所の拠点における研究者養成の向上を目指すことであった。

中国科学院には 100 を超える研究所があり、医科学研究所拠点のあるのが微生物研究所、その他、物理生物研究所や天文台、力学研究所などいろいろである。多くは理科系で、文科系の研究所も少数ある。それぞれに大学院生を採用しているが、大学院生の最初の一年はこの教育院で講義や実習を受けることになっている。すなわち、大学院の基礎的な部分は統一して教育院で教育するシステムで、2年目に各々の研究所の研究室に配属され修士や博士を目指して、研究生活を始める。

日本ではすぐに研究室に入ってしまうので、専門領域には多少深い知識があるが、非常に巾の狭い研究者になってしまう欠点がある。この欠点を補うため日本では大学院のコースワークの充実が叫ばれており、この中国のシステムには見習う点も多い。ただし、このようなシステムを採用しているのは中国科学院だけで、北京大学、精華大学などは日本のシステムと似ている。

学生たちのインタビューできわめて重要なことに気がついたの

で付け加える。それは、彼らの留学希望先である。大学院生の多くは将来海外に留学したいと思っており、その留学先で人気のあるのは米国と英国である。インタビューが日本人と知っていても、お世辞にも日本に行きたいとは言ってくれなかった。第2志望ならという学生が 2 人いた……。

中国の優秀な研究者にも魅力ある日本の大学になりたいものである。



中国科学院微生物研究所前にて

イギリス出張報告

助教 錦織 宏

3月16日(日)から2週間あまりの間、英国に出張してまいりました。目的は2つ。1つ目は文部科学省の事業として、日本における医学部の学士入学制度の導入に是非に関する国際調査を英国で行うこと。もう1つは医学教育振興財団の海外医学生臨床実習プログラムの提携校への訪問です。

学士入学制度の導入には賛否両論ありますが、英国では 2000 年より、約半数の大学で学士入学制度が導入されています。入学定員は全体のうちまだ 1 割にも至りませんが、教員の評価は非常にポジティブなものでした。また学士入学のみならず、英国の医学部に入学するルートは非常に多彩で、例えば経済的理由などで十分な中等教育を受けられなかった学生を対象とした入学制度と

いうものがあつたりします。英国の教育を「複線式」と表現することがありますが、日本においても教育の多様性をどのように受け入れていくかという点に問題の本質があるように思えました。

医学教育振興財団の海外医学生臨床実習プログラムは 1990 年から行われてきており、毎年 15 ~ 20 名程度の日本の医学生が英国の医学部に派遣されています。受け入れて頂いている大学の先生方に謝辞を述べ、また双方向性の交流の提案をするために、5 大学をまわりました。非常に好意的に受け入れられていることがわかったことと英国の医学生を日本に受け入れる可能性が探れたことが、今回の成果でした。

外国人客員研究員報告

外国人客員教授 Dr. Shirin Aqa Zarif



I am Professor Dr Shirin Aqa Zarif, a vice chancellor of the Kabul Medical University and a member of internal medicine department. I was invited as a visiting professor by IRCME, the University of Tokyo. According to my schedule, I was busy in two fields: conduct of research activities and improvement of knowledge of gastro intestinal endoscope. I visited Oji hospital and Kinan hospital and staffs there were very friendly, so I spent wonderful time with them. They introduced health services from family level up to district and provincial level. I also visited the facility to take care old age and disable people, which was interesting to me. I joined a net conference for solving the medical problems and gaining the junior doctors knowledge, which was wonderful. I visited the Mie University and some of the departments. I participated in the symposium for collaboration for higher education in Afghanistan which was beneficial to improvement of higher education in Afghanistan.

IRCME trainers and staffs did excellent for me. I appreciate that they prepared a nice schedule for me. The Tokyo university hospital and GI endoscopic section did all the best for me and they were very kind regarding improving my knowledge from the point of view of endoscopy knowledge. I learned much more regarding medical education and endoscopy and servicing of health facilities. I would like to thank Tokyo university particularly IRCME trainers and staff, and Gastroenterology department of the Tokyo university hospital as well.

外国人客員教授 Dr. Mohammad Farid Barnayar



I received an invitation from the University of Tokyo as a visiting professor and research fellow for training in Ultrasonography from 1 February 2008 up to 14 March 2008. When I arrived in Japan, there was a time table regarding my activity and stay in Japan for six weeks, which consisted of morning training in Hospital of Tokyo University and Ohji Seikyo Hospital and afternoon research activity at IRCME, the University of Tokyo. We visited university and medical education system in Japan, and I got training in Ultrasonography and learned more in this field and gained experiences very much. Also we had a trip to Mie prefecture, where we joined the training committee for hospitals in remote area and had a lecture for hospital staffs and students. The management system of hospitals in Japan was very excellent. Cooperation between people and government regarding the human resources limitation and insurance system was also impressive. The home care of old aged people was a good humanistic implemented idea, which we think the benefit for our country as well. The culture of the Japanese people was very good and hospitality and humanitarian senses of the

Japanese people was wonderful. Actually cultural point of view was also interesting to me, such as tea ceremony and Onsen (hot spring). Lastly, I would like to express my sincere appreciation to Japanese people, government, the University of Tokyo and JICA according to their helps for the people of Afghanistan.

外国人客員准教授 Dr. Dwi Tyastuti Kusuma



I am Dwi Tyastuti, staff member Faculty of Medicine and Health Science, Islamic State University, Jakarta. Our Faculty is the newest medical faculty that stood up in 2005. At this time we are cooperating with JBIC (Japan Bank of International Cooperation) in the field of development of a medical faculty building, a dormitory for students, a teaching hospital and human resource development by giving scholarship for 30 faculty staffs to study in Master and Doctoral programs in some universities in Japan. Today, especially in Indonesia, medical education is experiencing of very basic change in the curriculum, learning method either preclinical stage or clinical education.

As given by IRCME to our faculty, assignment of myself to learn medical education, is a very valuable opportunity. Here, I learn and practice directly concerning the concept of adult learning, study research evidences in education area, especially in medical education, and interconnect also them with our curriculum model, by utilizing the library of Tokyo University. Besides that, also was performed discussion with some lecturers, and visited Kyoto University to observe OSCE for medical students. IRCME gave an opportunity to me to follow courses of medical education performed by IRCME and JICA, and to give lectures about "Clinical Educations in Indonesia for Undergraduate Student" and "How to plan TOT of Faculty Development in Medical Faculty".

During 2 month activity, I have got a lot of benefit, as far as I can see beyond the words. Besides the knowledge about medical education, also learn how actually concept of applying adult learning and how to select learning methods that will be applied. I was also impressed by the culture of Japanese society with discipline and organizational system, especially in IRCME, is effective and professional.

着任挨拶

客員研究員 杉本なおみ



2008年4月1日より1年間、本センターにて研究・協働させていただき、客員研究員の杉本なおみと申します。私は医療者ではなく、コミュニケーション学を専門とする社会学者です。国際基督教大学語学科卒業後、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校スピーチ・コミュニケーション学科修士・博士課程にて、異文化コミュニケーション学、対人コミュニケーション学、コミュニケーション教育学を修めました。

帰国後は、日本人学生・臨床研修指導医を対象とする医療コミュニケーション教育・研究に携わってまいりました。その一方で、本来の専門である異文化コミュニケーションへの興味も捨てがたく、本センターにおける医学教育を通じた国際協力活動に大きな関心を抱いておりました。

そこでこのたび、慶應義塾大学の特別研究期間制度により、一年間本務校での教育・研究・管理の責務を解かれることとなりましたので、本センターにて医学教育分野での異文化協力について学ばせて頂くことにいたしました。

すでにラオスやアフガニスタンの研修員向け講義を担当し、学部の頃から慣れ親しんだ異文化コミュニケーションの理論と、近年従事している医療コミュニケーション教育の双方を融合する機会をいただきました。これから1年間、このような貴重な体験を重ねることを大変楽しみにしております。何卒よろしくご指導賜りますようお願い申し上げます。

特任研究員 三木祐子



2008年1月1日付で、特任研究員として着任致しました、三木祐子と申します。

私のバックグラウンドは看護師で、千葉県立衛生短期大学をはじめ、聖路加看護大学、東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻（発達医科学教室）修士・博士課程在学中、主に看護学、母子保健学（研究テーマは「集合住宅居住の母子の健康」）に関する教育、研究を学びました。また日本赤十字社医療センター、虎の門病院にて小児外科、脳神経外科病棟看護師、大学院修了後は、厚生労働省にて看護行政、その後出産、育児を機に東京証券業健康保険組合にて企業保健師として携わって参りました。

この度はご縁があり、当センターで勤務させて頂くことになりました。特に研究は数年来ご無沙汰しており、これまでのプランクを取り戻すべく、私自身の課題が山積みです。また医学教育は私にとって初めての分野であります。しかし医学と看護学は対象が人であり、人々に質のよい医療やケアを提供し、皆が心身共に健康になることを望む、というゴールは共通していると思います。これまでの臨床、研究、看護行政の経験を生かし、様々な方との出会いを大切にしながら、医学および看護学について様々な視点から、各々の魅力や課題を学問的に捉え、質の向上に貢献して参りたいと思います。未熟者ではありますが、今後ともご指導、ご鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。

引越し報告

医学部総合中央館の耐震補強改修工事が終わり、昨年7月中旬から一時移転先として過ごしてきた国際共同研究棟から医学部総合中央館に戻ることになりました。引越は5月19日、20日に行われ、台風の接近で予想外の雨に見舞われながらも、予定通り終了することができました。

新しい医学部総合中央館は、耐震補強がなされただけでなく、内装や空調設備なども一新され、より快適な職場環境となりました。また、担当ごとの部屋が隣接し、各部屋のドアも開放されているので、スタッフ同士のコミュニケーションが取りやすいだけでなく、外部の方々にもとてもオープンな雰囲気になっていると思います。

お近くに寄られた際にはぜひ、お立ち寄り頂ければと思います。皆さまのご来訪を心よりお待ちしております。
(片)



改修された医学部総合中央館

今後の外国人客員教授招聘スケジュール

センター外国人客員教授として次の先生方をお迎えする予定です。

○ Michael F. Lubin, MD (米国・エモリー大学医学部教授)

招聘期間：2008年7月7日～11月6日

○ Rebecca A. Harrison, MD (米国・オレゴン健康科学大学医学部准教授)

招聘期間：2009年4月1日～7月31日

外国人客員教授の招聘にあたり野口医学研究所に多大のご援助をいただきましたことを感謝申し上げます。



センター日誌：2008年1月～2008年4月

2008年	
■ 12月24日～1月5日 (13日間)	JICA ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト (以下、JICA ラオスプロジェクト) 現地活動 (北村)
■ 1月1日	三木祐子特任研究員着任
■ 1月6日～18日 (13日間)	JICA アフガニスタン医学教育プロジェクト短期専門家派遣 (大西)
■ 1月10日	Dr. Gordon Noel (米国オレゴン健康科学大学医学部教授) 講演会「欧米と日本における基本的臨床能力の教育～医療面接・身体診察・臨床推論・プロフェッショナリズム・EBM など～」
■ 1月21日～2月10日 (21日間)	JICA ラオスプロジェクト現地活動 (大西)
■ 1月26日	M2 学生対象共用試験 OSCE (客観的臨床能力試験) 実施
■ 1月27日～2月2日 (7日間)	JICA ラオスプロジェクト現地活動 (錦織)
■ 1月28日～2月10日 (14日間)	JICA ラオスプロジェクト現地活動 (田中)
■ 2月1日	Dr. Shirin Aqa Zarif (アフガニスタン国カブル医科大学教授)、Dr. Mohammad Farid Barnayar (同左) センター外国人客員教授着任 (3月14日まで)
■ 2月6日	Dr. Dennis H. Novack (米国ドレクセル大学医学部教授) 講演会「医学教育における行動科学」
■ 2月18日～24日 (7日間)	中国・新興 / 再興感染症研究拠点形成プログラム調査 (貴 客員研究員)
■ 2月18日～28日 (11日間)	JICA ラオスプロジェクト現地活動 (北村)
■ 2月18日～3月1日 (13日間)	JICA ラオスプロジェクト現地活動 (田中)
■ 2月18日～3月3日 (15日間)	JICA ラオスプロジェクト現地活動 (大西)
■ 3月1日	Dr. Dwi Tyastuti Kusuma (インドネシア国イスラム大学医学保健科学部講師) センター外国人客員准教授着任 (4月30日まで)
■ 3月7日～12日 (6日間)	米国ミシガン大学、スタンフォード大学医学教育視察 (北村)
■ 3月9日～15日 (7日間)	JICA ラオスプロジェクト現地活動 (錦織)
■ 3月12日	第7回医学教育国際協力研究フォーラム
■ 3月16日～4月2日 (18日間)	文部科学省委託事業による英国の医学部入学制度に関する調査および医学教育振興財団による英国の大学医学部との契約提携業務 (錦織)
■ 3月20日～23日 (4日間)	中国・新興 / 再興感染症研究拠点形成プログラム調査 (北村)
■ 3月27日	平成19年度第3回運営委員会
■ 4月1日	杉本なおみ客員研究員 (慶應義塾大学看護医療学部教授) 研究期間開始
■ 4月9日～5月1日	JICA ラオスプロジェクト本邦研修実施 (4月15日以降、平成20年度 JICA アフガニスタン医学教育プロジェクト本邦研修を合同で実施)

編集後記 ●●●

若葉の緑も日増しに色まさる季節となりました。昨年末に引き続きラオスでの現地活動が本格化する一方で、日本国内では3名の外国人客員教授の受け入れ、第7回医学教育国際協力研究フォーラムの実施、ラオスとアフガニスタンの合同研修の実施など、イベントが多い期間でした。慌しさの中にも、色々な国の方々と交流できる楽しさがあり、今ではあの賑やかさが懐かしくさえ感じられます。きれいに改装された医学部総合中央館へ移り、これからは気持ちも新たにしていきたいと思います。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。(片)

発行元 ●●●

発行 2008年6月30日
 発行人 山本一彦
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
 TEL 03-5841-3583 FAX 03-5802-1845
 印刷所 三美印刷株式会社